

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月22日現在

機関番号：37601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21580047

研究課題名（和文）中世禅宗庭園の成立要因に関する研究 —中国臨済宗による思想的背景とその影響—

研究課題名（英文）Study of the factors in the establishment of Zen gardens in medieval times – philosophical background and effects of the Chinese Rinzai sect –

研究代表者

関西 剛康（SEKINISHI TAKAYASU）

南九州大学・環境園芸学部・教授

研究者番号：80461656

研究成果の概要（和文）：本研究は、禅の産物である日本中世の禅宗庭園に関して、禅の産物を研究する造園学と宗教学及び美術史の研究成果との統一の見解を得るために、禅宗庭園を取り巻く成立背景の一端を明らかにした。研究成果では以下の知見が得られた。1）造園学と宗教学及び美術史の研究成果を比較研究した結果は、禅宗庭園が中国官僚の士大夫の文化的解釈に影響された観点に立った研究アプローチの可能性を得た。ここに禅の産物としての横断的研究の方向性を見出せた。2）義堂周信の『空華日用工夫略集』を対象とした文献調査の結果、14世紀後半の禅宗庭園の用途は、①座禅修行の場、②詩作の場、③花見や眺望の場であった。そして、3つの用途は重層的な使用であった。この庭園利用は、文学の詩的情緒性によっても認識されており、そこには禅の思想ではなく、中国の文学と思想にも影響された知見を見出せた。

研究成果の概要（英文）：In this study, the author clarified part of the background of the development of Zen gardens, in order to obtain the research outcome and unified theory of landscape architecture, religious studies, and art history, regarding Zen gardens in medieval times in Japan. The research outcome included the following findings: 1) The research results of landscape architecture, religious studies, and art history were compared, and the author found the possibility of researches from the viewpoint in which Zen gardens were influenced by the cultural interpretation of Shi-taifu, which is a Chinese bureaucrat. Here, there is the direction of interdisciplinary researches as a Zen product. 2) “Kuuge-Nichiyou-Kufuu-Ryakushu” authored by Gido Shushin was delved into, and it was found that Zen gardens were used for ①seated meditation training, ②writing poems, and ③viewing blossoms and landscapes. These three purposes were multilayered. Such use of gardens is recognized in the poetic emotional aspect of literature, and it was found that it was influenced by Chinese literatures and philosophies rather than the Zen doctrine.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：農学

科研費の分科・細目：園芸学・造園学

キーワード：日本庭園、禅宗庭園、禅林美術、庭園史、中世、禅

1. 研究開始当初の背景

中世の日本庭園史は、山水河原者や阿弥衆による作庭者の研究は近年少なからず進捗している。しかし中世の禅宗庭園に関しては、その成立思想基盤である臨済宗の「禅」について、今まで造園学分野からの研究結果では、そのほとんどが「仏の表現」や「禅の宗旨による宗教的産物」といった見解が大部分を占めており、俗に禅宗思想を背景として成立したとされる研究成果を基本としている。ただ、その既往研究の中には極僅かの禅宗否定論もあるにはあるが、その後ほとんどといってよいほど進展していないのが実情である。

また近年明らかとなりつつある本研究に関連する近接分野の学術的動向としては、同様に禅宗を媒介として研究対象とする禅宗の宗教学と禅林美術の美術史との見解と、造園学の禅宗庭園の見解とは一線を隔している。

例えば宗教学分野による禅宗の見解では、中国禅宗まで遡った研究も多数あり、禅宗庭園の成立に影響を与えたとされる中国臨済宗に関しては、中国高級官僚階級である士大夫との癒着関係から生ずる世俗化が説かれ、臨済宗の宗教性を神格化した研究成果はほとんどみかけない。この禅宗（特に臨済宗に対する研究が対象）の研究も、日本から中国まで遡って研究が進展しており、単なる宗教を神格化した研究成果ではなく、中国高級官僚階級である士大夫との政治的背景までもが研究されている。

また同様に、中国臨済宗を受容して発展した日本臨済宗を中心とする禅林美術（五山文学・詩画軸や塔頭の障壁画の絵画等）に対する美術史分野による見解も、禅宗の宗教性を単に神格化した研究成果ではなく、その成立背景に関して、中国伝来からその美術創作を禅宗の世俗化と考察しており、宗教性による影響よりも中国文化・思想による影響の方を取り上げている。

このような研究背景から、今後の禅宗庭園の研究に関しては、造園学分野の禅宗に関する思想把握を都合の良い面のみ取り出して、禅宗庭園を神格化するような研究態度ではなく、広く他分野の研究成果との共通基盤をもつ見解の上での研究態度が必要とされ、ここに造園学分野における禅宗庭園の成立基盤を再検証する時期に来ていると著者は考えている。

2. 研究の目的

日本中世の禅宗庭園の成立に関する思想的背景について、宗教学や美術史における他の研究成果との比較研究を行うことで、その統一見解を導き出すことにある。これにより禅宗を取り巻く文化的背景の一端が把握することができ、日本中世の禅宗庭園並びに

文化的研究の進展にも繋がるものとする。この上記に関する背景として、更に明確に発展させるために本研究では、

- (1) 中世日本の禅宗庭園にみる禅林美術としての統一性のある見解を検証
- (2) 中世日本の禅宗庭園の成立における思想的背景について、禅宗思想に内在する中国臨済宗の影響性の発見

の2点を説明することを研究の主目的とし、将来を見据えた東アジア文化圏としての庭園文化の研究を目指した。

3. 研究の方法

(1) 近接分野との横断的研究

本研究は、まず禅宗を対象として研究している造園学の近接分野と考える宗教学と美術史の研究成果から、禅宗庭園を研究するにおいて造園学におけるアプローチとして把握していない各研究成果を精査した。この調査結果により、各分野を横断する見解が得られることを期待した。具体的には、既往研究を踏まえた思想的背景に関連する要因を①臨済宗の世俗化的性格と権力者との結合、②信仰の趣味化、③中国文化の影響と捉えた。しかし、この3つの要因から、どのように禅宗庭園が創作されるにいたる動機付けや、その解釈がどうであるのかについては、更に検証をする余地が残されていると考えられた。そのため、この3つの要因に関して、庭園史研究の多様性を図るため、造園学に依らない、宗教学と美術史による観点で禅宗、特に臨済宗に関して再検証した。

(2) 中世の禅宗庭園の成立背景の研究

研究方法は、義堂周信（1325-1388）の日記である『空華日用工夫略集』を研究対象に文献調査を実施した。調査項目は、主に第1に禅宗庭園の使用事項に関する記事とし、場合によっては庭園周辺までも含んだ記事とした。第2に義堂の詩作や禅に関する思考事項に関する記事を対象にした。そして、調査結果を基に、禅宗庭園の具体的な使用のされ方を庭園ごとに整理し、その庭園の使用事項や目的を明確に整理した。それを義堂の師である夢窓疎石（1275-1351）の庭園観や宗教観、文学観と合わせて比較検討することで、義堂の庭園観を把握した。このことから夢窓示寂後の14世紀後半の禅宗庭園の在り方を考察した。

4. 研究成果

(1) 禅宗庭園の思想的背景に関する近接分野との横断的研究成果

日本の中世禅宗庭園の思想的背景に関する既往研究は、仏教思想としての「禅」の教義のみを基に成立した見解から始まり、禅思想を必要十分条件とした、いわば一因的存在ではなく多因的存在とする2つに大別される

研究アプローチと考えられてきた。しかし本研究では複数要因の各論による検証を試みている後者に関し、近年において研究が進捗する宗教学や美術史の見解を用いて、研究が停滞気味の中世禅宗庭園における思想的背景に関する研究アプローチのための基礎的考察を試みた。3つの要因に関して、まだ造園学では研究材料として明確に認識されていない観点について、他分野研究による再検証を行った研究成果を以下に纏めた。

① 臨済宗の世俗化的性格と権力者との結合に関する再検証

既往研究では、栄西の「興禅護国論」の著作動機のように、初期段階から「兼修禅」的性質が濃厚とされ、旧仏教外護者（公家貴族階級）及び新興勢力層（武家階級）への浸透による権力者との結合が指摘され、両者の交流が造形の出現を促進し、経済面にも援助を得たとされていた。この指摘について、補完に必要な宗教学における観点は以下と結論付けた。

始めに中国臨済宗は、楊枝派の円悟克勤（1063～1135）が著した『碧眼録』等にみる「現成公案」と称する模範解答を利用した問答修行となり、その弟子である大慧宗杲（1089～1163）の時代に中国臨済宗は隆盛を迎えたとされていた。大慧が考案した「看話禅」は、弟子に一つの公案を読ませて徹底して考え抜くことで、悟りが得られる修行とされた。この修行方法は、科挙出身の中国高級官僚である士大夫に受け入れられたことで交流が頻繁となった。つまり、中国の高級官僚階級である士大夫の影響で中国文化芸術の基盤を得た中国臨済宗と、坐禅を本来とした修行により頑なな態度をとった中国曹洞宗とでは、後の文化芸術の創作基盤の形成に対する影響が全く異なるとされていた。この宗旨は日本禅林にもそのまま影響を与え、日本臨済宗の栄西と日本曹洞宗の道元にまで伝わり、ここにも日本臨済宗による禅宗文化発展に関わる思想的な根本要因が存在するものと考えられていた。

大慧に次いで、「虎丘派」の全盛期が訪れた。虎丘派は、その法孫にあたる密庵咸傑（1118～1186）の門下から松源崇岳（1132～1202）・破庵祖先（1136～1211）・曹源道生（？～？）の3人の中国禅僧を輩出した。後に日本に来朝し教化した中国禅僧は、そのほとんどがこの中国臨済宗楊岐派の流れを汲む3門派であった。つまり、禅宗文化として発展する門派は、臨済宗楊岐派の流れであり、ここに後の日本における禅宗庭園発展の要因に繋がる人脈が窺えた。

② 中国文化の影響に関する再検証

既往研究では、禅宗庭園の成立に中国の假山や盆庭並びに山水画の影響を示され、更に中国の山水画や各種文献からの影響を受け

たと指摘されていた。この指摘については、補完に必要な宗教学における観点は以下と考察した。

中国臨済宗の禅が文化的基盤を得た最大の理由は、士大夫との交流にあるとされていた。これは大慧の門派が、中国禅宗界において優勢を占めると、士大夫に中国臨済宗が普及することになった。そして文化的で教養豊かな士大夫が、禅の最も有力な支持基盤となったことにより、特に楊岐派が世俗化された。この士大夫の高度で知的な性質の主な要因として、中国で実施していた官吏登用試験である「科挙」に由来するところが大きいとされていた。なぜなら禅林では、科挙に合格した中国官僚知識層である士大夫との交流や、科挙に失敗した有識者の多くが禅僧になったという性質もあり、多数の禅僧が四書五経（四書：大学・中庸・論語・孟子、五経：易経・書経・詩経・春秋・礼記）等に精通し、高度に学識のある教団として形成した背景があったとされていた。この時代は、中国文化の伝統的思想を理解する士大夫との交流により、禅宗思想以外にも、隠遁思想・山水思想・神仙思想・儒教思想等が重層的に織りなす高度な知識が組み込まれたことで、複雑な思想体系を築いたとされ、これも要因となり、芸術文化である書・詩・水墨画等と、高度な芸術性をもった教養を得ることとなったとされていた。造園学における禅宗庭園の研究アプローチには、この中国臨済宗に内在した文化性の認識が希薄であったことが判明した。

③ 信仰の趣味化に関する再検証

既往研究では「雑修」の禅を、外来文化を享受した禅僧とそれを望んだ武家階級との関係性の中で成立した「副産物芸能」と位置付けていた。この指摘については、補完に必要な美術史における観点は以下と考えた。

中国臨済宗より享受した文化芸術の副産物の1つに文芸がある。日本臨済宗では「文雅の友社」と呼ばれる一種のサロンにおいて、五山文学が隆盛された。この五山文学に関して、夢窓の弟子である義堂周信（1325～1388）は、『空華日用工夫略集』応安3年（1370）8月4日の条に、装飾し過ぎる詩文に対し、士大夫の文章に溺れることなく、高僧の文章を学ばなくてはいけないと記載していた。ここから中国の官僚知識層である士大夫の文化的影響が日本臨済宗の禅林内に十分に浸透されていた。

また14～15世紀にかけて、塔頭での詩会で発生した詩画軸は、ほとんどが山水画であり、その中でも書斎画がかなりの割合を占められた。禅僧の心情としては、世俗を離れた自然環境の中で隠棲することにより、修行三昧に没頭できるような高踏的な生活に憧れる小庵や書斎を描いた題材が大部分であり、

ここに士大夫からの隠遁思想等の影響が窺われた。この五山文学や詩画軸の発展は当然、禅宗庭園に与えた影響も大きいと考える。つまり、禅僧が詩文を研究・研鑽することにより、義堂の文献中にあるような中国の文化芸術的な解釈により、禅宗庭園をも解釈する傾向があった可能性は高いと結論付けた。

(2) 14世紀後半の禅宗庭園観に関する研究成果

文献研究の成果から14世紀後半の禅宗庭園には、大きく3つの用途がみられた。主な用途は、第1に禅の修行の場としての境地、第2に倭漢聯句や偈頌を詩作する場としての風雅な境地、第3に春の観花や秋の紅葉、冬の雪景色等の花見や眺望景観を楽しむための遊興の境地であり、時には単独で、また時には混在して使用されていた。また調査結果である21記事における8項目(座禅・講義・春の花見・秋の紅葉・眺望・庭園観賞・詩作・偈頌)は、年代に関係なくほぼバラツキのある状態で分布していた。このことから貞治元年(1362)に最初の記事があることから、義堂が鎌倉に赴任した延文4年(1359)頃からは、すでに3つの用途による使用がされ始めたと考えられた。

3つの用途に関して、『空華日用工夫略集』の中で義堂はどの位置付けているかについて、以下に纏めてみた。

① 禅の修行にみる庭園観

義堂は禅の修行について、貞治6年(1350)10月13日条の記事まで義堂は日記の中に、改めて記述はしていなかったが、実は日常的に厳しい座禅修行を20年以來続けてきたと記述していた。また応安3年(1370)9月晦日条にも、座禅修行を怠っている僧に対して、夢窓が開基した時から現在までも座禅が修行であり、その大切さを記述していた。このことから、永徳2年(1382)10月13日条に義満が西芳寺指東庵で座禅や講義を聞いたように、日常的に建築や庭園に於いても、禅の修行がされていたものと考えられ、やはり夢窓疎石の示寂後も禅宗庭園は禅の修行の場とすることは改めて第一と考えられた。

② 倭漢聯句や偈頌を制作する場としての庭園観

しかし夢窓示寂後の禅宗庭園は、禅の境地でありながらも、風雅漂う五山文学の制作場所にも兼用されていた。庭園に関する偈頌の記事は、応安2年(1369)5月20日条の建仁寺正統庵において瑞泉寺一覽亭に掛かる偈頌の詩板の事例に出した1件しかなく、後は倭漢聯句を主とした詩作の場としての用途であるため、庭園での詩作内容に移行があったと考える。夢窓の14世紀前半には、宗教的な「偈頌」を主に制作していたが、義堂の14世紀後半になると宗教的内容は減少して風雅な内容に移行している。同じ庭園の捉え

方も詩作同様に捉えられているものと考えられた。ただし、詩作は風雅を増すことで仏教性が薄れたが、あくまで庭園も修行の場であると考えため、2つの考え方による重層的な捉え方がこの頃から形成されたものと考えられる。つまり禅修行と詩作の場所は同じでも、主目的は禅の修行場であり、禅を補うために同庭園でも詩作することが思考され始めたのがこの時期からと判明した。

この重層的思考は、義堂が文学に秀でたことにも影響していると考えた。日本の五山文学を代表する文学僧である義堂の詩は、すでに彼の存命中に本場中国に広く知れ渡っていたとする記事が、応安8年(1375)3月18日条にある。この記事には無聞普聡が、楚石梵琦の会下に会った際、義堂作の詩文が多くあるのを見た。来日僧の楚石は「これは入唐者の作る仕事なり」と言ったが、会下の日本人は無聞を初め、共に参じた介然中端も「この人は入元した経歴のない人である」と言った。しかし楚石は中々信じないで再三問答の末に、信じられない様子で、「日本にこれ程の人物がいるとは思えない」と告げたとされていた。また永和2年(1376)4月20日条には、中国江南より伯英徳儒と大年祥登が来日して、伯英が中国に居て多くの義堂の詩文を見て、中国人が賞賛していると告げていた。これらの記事から義堂の詩文はすでに中国僧や江南において高く評価されていたことが窺われていた。それでは、その義堂にとって、詩作する行為はどのようにとらえられていたのだろうか。応安2年(1369)9月2日条に義堂は、日本では奈良時代よりの式部省での詩を課するために春期と秋期に行われる試験に合格する文章生のように詩を学ぶのではないと考えられていた。これは座禅や問答等の修行を禅宗としては主行為として悟りの境地へとするが、詩作の行為は禅を補完するものであり、ただの風雅趣味の吟詠だけではないとの考えであるとされていた。義堂の解釈は、禅宗庭園は禅修行の場としても、禅宗庭園で詩作する行為自身も禅修行を補完する役割を担っていると考えていることになり、禅宗庭園における行為としては相違があるが、禅の悟りへと導く方法としてはこの2つの行為は矛盾しないと理論的に拡大解釈で考えていた。

また応安3年(1370)8月4日条に義堂は、今の僧の詩は常に士大夫の詩体を学んでいることを戒めており、もっと古の高僧の詩体を学ぶことが良いと記載していた。しかし、これは夢窓疎石の考え方とは異なるもので、夢窓の暦応2年(1339)5月に制定された『三會院遺誠』の最初には、「其れ心を外書に酔はしめ、業を文章に立つるが如きは、此れは是れ剃頭の俗なり。似て下等とするに足らず」と記されている。夢窓自身は、最初に漢

文学に溺れることは、修行の妨げであると考
えていた。しかし、そうした考えも夢窓晩年
には、詩文制作を行う来日僧による漢文学の
受容が五山文学へと発展することにより、こ
の文学文化を認めざることになる。この心境
の変化が、彼の晩年の『夢中問答』の中に、
「詩歌管弦其のしなことなれども、人の心の
邪悪なるを調て、清雅ならしめんためなり」
として人心を清雅するとの条件によって、詩
文を肯定する考え方を容認し始めている。し
かし夢窓の本心は、「しかれども今時のやう
にをみれば、これを能芸として、我執をおこ
さるの故に、清雅の道はすたれて、邪悪の縁
とのみなれし」と、詩文に傾倒していく禅僧
の姿勢に対して、禅修行の妨げになると嘆い
たとされていた。研究結果では、夢窓示寂前
から示寂後のように、義堂は庭園において聯
句等の詩作を行っており、夢窓は詩文に傾倒
しすぎないように注意しつつも、義堂とは初
めから根本的に詩文に対する考え方が異な
っており、示寂後は義堂の拡大解釈の方針が
禅林では一般化していくものと判明した。

③ 花見や景観を楽しむための遊興の境地

研究結果から、春の観花や秋の紅葉、冬の
雪景色、眺望、滝の観賞等の記事が検出でき
たが、これらはほぼすべて、禅僧・武家・公
家等による複数人数で臨んでおり、禅宗庭園
がサロン化していたことが改めて窺われた。

次に、各庭園は観賞するための施設が存在
することがほとんどであった。西芳寺の座禅
堂として建立された指東庵以外は、瑞泉寺の
一覽亭からの眺望、西芳寺の縮遠亭からの眺
望、常在光寺の楓橋亭からの紅葉観賞と樹王
亭からの観花、大慈院の梅亭での梅花、天龍
寺の龍門亭からの戸難瀬の滝の観賞等は、観
賞並びに休憩するための拠点施設であり、そ
れらが同時に詩作するための拠点ともなっ
ていたと考えられた。

また、応安4年(1371)2月1日条の記事
で瑞泉寺の一覽亭からの眺望景色に対して、
杜甫の詩句が虚しいほどであるとの感想や、
至徳元年(1384)9月18日条の記事で西芳寺
での詩文に陶淵明や中国洞庭湖に模して表
現していることから、中国の詩人や景観によ
る解釈で庭園や周辺環境を認識していた。ち
なみに、永徳2年(1382)正月5日条には、
「暁来小雪庭松に蒙り、宛も老人の頭白の如
し。感有り因て坡詩を吟ず。(後略)」と記さ
れており、雪が小松に降り積もった景色を老
人の白髪頭のように感じたことで、蘇東坡の
詩を詠んだと記している。これらのことから
も中国文学に影響を受けた義堂らの五山文
学僧の影響が、庭園環境の解釈に表れてい
ると判明した。

(3) 今後の中世禅宗庭園の成立要因に関する 研究の展望

以上、研究成果より得られた知見を列挙し

てきた。禅宗庭園に関する本研究により、造
園学ではほとんど知見されてこなかった中
国文化・思想の影響が明らかとなってきた。

本研究は、今まで禅の宗旨によってのみを
第一として構築されたと考えられていた中
世の禅宗庭園が、中国の禅宗、特に中国臨濟
宗と中国士大夫階級との癒着によって受容
していた中国古代思想・文化に大きく影響さ
れていた結果、禅宗思想ではない中国古代の
文化や思想に影響されていた一端を明る
みにした。今後、日本と中国両国からの調査・
検証をすることで、広く日本庭園史だけでは
なく、東アジア庭園文化圏としての共通思想
としての連関性を表わす、進展した研究領域
の第一歩が踏み出せるものと考えている。また、
この基盤研究の進展から今後は、禅宗が中世
日本庭園に与えた影響を考えると、禅宗思想
の影響を享受したとされる16世紀後半にお
ける枯山水庭園やと露地にも、新たな成立背
景に関する研究も考えられるため、大いに中
世日本文化の研究が進展される可能性がある
と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 関西剛康『『空華日用工夫略集』にみる
14世紀後半の禅宗庭園観に関する研究』、
日本造園学会『ランドスケープ研究』(査
読有)、Vol. 74、(2012) P 367-372
- (2) 関西剛康「禅宗庭園の思想的背景に関
する研究アプローチの基礎的考察」日本造
園学会九州支部『研究・事例報告集』(査
読無)、Vol. 19、(2011) P5-6

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 関西剛康『『空華日用工夫略集』にみる
14世紀後半の禅宗庭園観に関する研究』
日本造園学会全国大会、2012年5月20
日、大阪府立大学
- (2) 関西剛康「禅宗庭園の思想的背景に関
する研究アプローチの基礎的考察」日本造
園学会九州支部鹿児島大会、2011年5月
7日、鹿児島大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関西 剛康 (SEKINISHI TAKAYASU)
南九州大学・環境園芸学部・教授
研究者番号：80461656

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし